

G. Greene研究

Under the Garden

—〈rogue〉を手がかりに—

宮野祥子

I

Under the Garden, A Visit to Morin (1957), Dream of a Strange Land, A Discovery in the Wood という四短篇を収録した、*A Sense of Reality* と題する作品集が発表されたのは1963年である。1963年とは、*A Burnt-Out Case (1961)* と *Comedians (1966)* の二長篇の中間の時期であり、暗い悲劇的な雰囲気の領域から、喜劇的雰囲気の領域へと、G. Greene の作品の傾向が展開していく過渡期である。もち論、それ以前にも *Loser Takes All (1955)*, *Our Man in Havana (1958)* とか、ドラマの *The Compliant Lover (1959)* という喜劇的傾向を示す作品もあるが、作者自身も *A Burnt-Out Case* の序で述べているように、この時期に、喜劇的傾向への傾斜を認めており、この作品集は喜劇的領域へ到る、ひとつの橋という意義があるとも思われるのである。

なかでも、*Under the Garden* は、作者が満足のできる傑作のひとつとして選んでいる作品であり、喜劇的領域へのひとつの道標となる〈rogue〉にあらわされている二面性によって、Greene の登場人物を解釈する興味深い手がかりが隠されているようである。

この作品は三部に構成されていて、第一部では、未来に関心がなく生きる意欲を失った初老の Wilditch が、生命にかかわる病に犯され、幼いころ、母と兄とともに、夏の休暇を過ごした Winton Hall を訪ねる。元来

は伯父の所有で、父親のいない一家は、毎夏そのようにしていたのであるが、今は、独り者だった伯父から兄が遺産相続をしている場所である。時代の変化とともに周囲の風景も変わり、家の内部も改造されているなかで、庭園だけが昔のまま残っている。あらゆるものの大きさだけが、子供のころとは違っているだけである。その夜 Wilditch は、母の遺品のなかに、幼いころ学校に提出した作文を見つける。だが、その作文が、今まで彼が心の奥深く秘めて、抱き続けてきたあるひとつの夢、彼にとっての〈リアリティ〉とは、あまりにも違った内容に変えられてしまった、発想の〈浅薄な常套的な白昼夢〉(p. 27) の物語となっていることに驚いたのである。彼は幼い自分に腹立ちをおぼえ、生涯を支えてきたと思われる夢、あるいは幻、あるいは空想、あるいは彼にとっての〈リアリティ〉の基盤となっている冒険の物語りを、過去の回想を、書き始めるのである。

第二部は、作品の半分以上を占めるその探険の物語である。庭園には池があって、その池の中に島があり、その地下へと入り込んでいく探険の回想記であり、『宝島』、『ロビンソン・クルーソー』、『ジャックと豆の木』という子供の読物の主人公の行動を下敷としたりしている。この地下で、彼は Javitt と Maria という老人と老婆に出会い、Javitt から人生の秘訣を学び、財宝を見せてもらい、彼らの娘 Miss Ramsgate を探すという人生の目的を得て、〈黄金のおまる〉をもらって地上に帰ってくるという設定になっている。地下では、時は地上の時間を超越して流れ、それが何時間の、あるいは何日間の体験であったかは、はっきりしない。

第三部は夜明けまで書き続けた Wilditch が、庭を散歩する途中、Ernest という Javitt のモデルと思われる、昔からの庭師に会い、また、心に描いてきた池と島の、現実のあまりの小ささに、自分の内に秘めてきた出来ごとが、たんなる白昼夢でしかなかった、と理解する。そして何だか裏切られたような気がして、多くの国々を旅し、職業を転々としてきた生涯とは別の、結婚して住居を定め、落ち着いた生活があったのではないか、と思ったりする。だが、島で、実際に〈黄色のペンキが数か所付着している〉〈古いブリキの室内便器〉(p. 74) を見つけて、自分を支えてきた、この

夢の〈リアリティ〉を再確認し、生への関心を取り戻すのである。

このような構成から、すぐさま、〈失われた幼年時代〉という Greene のひとつのテーマが示唆されるのは確かである。そして、さらに Wilditch の生涯が、ただ流れゆく虚しいクロノスの時間ではなく、過去と現在と未来とを、^(注3) 現在時において統合し、ひとつの意味をもつカイロスの時間^(注4)であることを証明するための、Wilditch の内的〈リアリティ〉が、問題として提示されていると考えられる。

その内的〈リアリティ〉を証明するものとして、庭園という実在する場が設定されている。そこでは、クロノスの時間の経過を有機的にカイロスの時へと変質させる場としての〈庭の下〉となっているのであろう。つまり〈失われた幼年時代〉の過ぎゆくことと、過ぎゆくことなく内在しつづけることの、交差する場なのである。

そうであるならば、Wilditch の〈リアリティ〉を枠づける場としての〈庭〉の持つ、地上の領域と地下の領域の意味するところ、さらに、Wilditch 少年の生涯を決定した Javitt の教えた〈rogue〉の生き方、生の希望の象徴としての Miss Ramsgate などが問題となってくるのである。次章において、そのような点について考察してみたいと思う。

なお、テキストは、*A Sense of Reality*, The Bodley Head Ltd. 1963年版である。

II

*

舞台となっている Winton Hall の〈庭〉は、自叙伝で語られている、伯父の所有する Harston House 一庭のいたるところにリンゴの芳香がただよい、^(注5) 柘植の生垣が香り、暑い夏には、蜜蜂の低い羽音が聞えている—をモデルとしているようである。Greene は子供のころ、そこで夏の休暇を過ごし、作品に描写されているような、隠れん坊遊びにびったりの、〈果樹園のある古い様式の大きな庭園〉であり、〈島のある大きな池〉〈噴水〉(p. 2) 〈Shady Walk〉(p. 22) —作品では 〈Dark Walk〉となっている

一などがあつた。或る年、母親が遊び相手に連れてきた少年に、意地悪をして泣かしたというエピソードが示すように、幼い Greene は〈the great rambling garden〉(p. 22) を歩きまわつたようである。〈I had a very possessive feeling〉(p. 22) という独占意識は、*Under the Garden* においても、〈In his memory he did not share the house with others : he owned it〉(p. 15) と描かれていて、Wilditch 少年の庭での孤立が暗示されている。

例えば、Winton Hall という場所が、Wilditch の兄によれば、彼の母親は好きではなかつた (p. 20) ということがある。Wilditch と母親は、Winton Hall に関して違つた受けとめかたをしていた。というのは、母は若いころ、Fabian の教育を受けて、何ごとも明晰であることを望み、解答の得られない〈secrecy and mystery〉(p. 22) を嫌つたのである。Wilditch 少年の好きな隠れん坊遊びも〈secrecy and mystery〉を表わすものとして嫌い、その遊び場所である池や島を嫌い (p. 22)、灌木の多い庭すべてが気に入らなかつた (p. 21) ということになっている。また、兄がこの場所を相続する時、反対をした母は、その場所で収穫される野菜のことで、いつも庭師の Ernest ともトラブルが生じていた (p. 20) という。Wilditch 少年のお気に入りの世界である Winton Hall は、また、異つた意味と雰囲気とを伝えているのである。

さらに、自叙伝のなかでは、子供たちの遊び場でもあつた噴水が、作品においては、〈It never played in my time either〉(p. 17) ということになっていて、昔も今も水は噴き上がらない。

庭における〈fountain〉は、元來生命の泉を象徴し、そして庭園はひとつの完全な世界(宇宙)であるといわれている。また、母と子の住む庭とは、聖母マリアと幼児キリストの住む愛の庭を暗示している。^(注8)しかし、Wilditch 少年の過ごした庭園は、彼が幼くて気付いていなかったのだが、実は、母と子の不理解、母と庭師のトラブルという、不和と分裂の園、愛の実らない不毛の園であつた、ということができるのである。噴水がいつも故障してつたという設定は、その象徴であらう。

庭園において、池を造りその中に島を造るということは、楽園の内部にさらに小楽園を囲い込む退行的な行為である^(注9)と云われている。第二部で語られている、Wilditchが侵入した島の地下の領域は、いわば地上の園から脱出して、外の世界に逃避するのではなくて、より内部に、より原点へ、負の方向へとその行動が向っていることがあらわされている。

大木の根がアーチ状の、洞窟の入り口のようにになっている所から、這って入り込んでいった地下の領域は、何年生きているのかわからないような、老醜の Javitt と Maria が住む場所である。だが、そこは何不自由なく、莫大な財宝と共に、時を超越して、不死であり得る世界である。

Javitt は〈講演者か予言者〉(p. 40) のようでもあり、また、古い腰掛式便器に腰かけているところは、〈王座の王〉(p. 41) のようでもある。そして例えば、スプーンの置き方が悪いと言って、次のように怒っている。

I'll starve yon, I'll set yon alight like a candle for a warning. Haven't I given you a kingdom here of all the treasures of the earth and all the fruits of it, tin by tin, where time can't get in to destroy you and there's no day or night, ... (p. 58)

ここは〈違法者〉(p. 58)の居てはならない、彼の支配する王国なのである。だが、同時に、〈この世のあらゆる財宝、全ての産物の置いてある王国、時が侵入しておまえを破滅させることがなく、夜も昼もないところ〉とは、人間にとっての憧れの楽園にほかならない。

この楽園はまた、さまざまな宗教的イメージによって、聖なる領域であることも暗示されている。例えば Wilditch が使った〈本物の黄金の室内便器〉(p. 47) は、その日常的な行為に、〈the importance of a ceremony, almost of a sacrament〉(p. 48) を与え、その音は〈far-away chimes〉(p. 48) のようである。いよいよ財宝を見に出かける折の〈like a couple of soothsayers bent over the steaming entrails of a kid, waiting for a revelation〉(p. 61), 〈he reminded me of a gigantic crucifix〉(p. 62),

<the lamp swung to and fro like a censer> (p. 63) という描写によれば、この地下の世界が、王国であり、楽園であり、神聖な領域として設定されているようである。

陽のあたる地上の Winton Hall の世界を、噴水も枯れている、生命力のない不毛の園とするならば、この地底の陰の領域は、豊かさや不死の楽園であろう。地上のすべての産物を地下に貯える (p. 46) ことによって、永続することができるのである。つまり、陽の世界のエネルギーを陰の世界に取り込むことによって、逆に、本来ならば陽の世界にあるべき生命力をそなえている、という意味で、ここには、後述するように、陽（正符号）と陰（負符号）の世界のパラドックスの可能性がうかがわれるのである。

*

この楽園の王であり、守護者 <I wouldn't let the bastards enjoy what they could find here> (pp. 45—46) でもある Javitt, そしてその妻であり、母であり、恋人である (p. 41) Maria には鳥のイメージ (p. 37) が与えられているが、また植物のイメージも与えられている。それは、植物の繁殖の周期によって示される再生神話を暗示し、楽園のひとつの要素である豊穰を表わしていると考えられる。Javitt は生命の誕生を次のように説明している。

Everything that comes out of me is alive, I tell you. It's squirming around there, germs and bacilli and the like, and it goes into the ground like a womb, and it comes out somewhere, I daresay, like my daughter did—
(pp. 44—45)

Maria and me, we just grew into each other, that's all, and then she sprouted.
(p. 59)

<種やバチルスやそんなもの> が <子宮のような大地に入り> <娘がど

こかに発芽する〉とは、植物の増殖のありさまである。

さらに、Javitt が自称する〈rogue〉とは劣等種のことで、苗床で抜き捨てられる悪い苗のことである。^(注10)彼の云う〈rogue〉とは、正符号〈the plus sign〉から〈zero〉へ向い、さらに負の〈base〉に到った種族である。

People who keep nursery-gardens look around all the time at the seedlings and they throw away any oddities like weeds. They call them rogues. . . . But sometimes you find someone who wants things different, who's tired of all the plus signs and wants to find zero, and he starts breeding away with the differences. Maria and I are rogues and we are born of generations of rogues. Do you think I lost this leg in an accident? I was born that way just like Maria with her squawk. Generations of us uglier and uglier, and suddenly out of Maria comes our daughter, who's Miss Ramsgate to you. (p. 53)

彼に依れば、〈rogue〉とは、正符号を捨ててゼロへと何い、そこから正符号ではないもの〈the differences〉を幾世代も育てることによって生ずる純粋な劣等種、異種のことである。正符号からみれば、ますます負の状態、醜くさを完成させていくことである。例えば Javitt は生来片足であり、Maria は口蓋がないので〈squawk〉しか発声できない。だが美しさとは収穫逓減の法則〈the law of diminishing returns〉(p. 52)に従い、文字どおりものごとが醜くさの基盤〈real ugly base of thing〉(p. 52)に到った時、新しく〈自由に独立して〉(p. 52)始まるチャンスがある。美とはそういうものだと云う。そこに美人コンテストの代表となるような Miss Ramsgate の誕生の根拠があるとするのである。

Miss Ramsgate の美しい肢体を掲載しているグラビアを見た Wilditch 少年は、一目で恋してしまう。〈7才の子供が生涯をかけて、肉体を恋してしまうことができるものだろうか〉(p. 49)と現在の Wilditch は思うのだが、ともかく、〈眼の表わしていることだけではなく、肉体の表わしていることにも〉(p. 49)心奪われてしまったわけである。彼は〈彼女以

外の誰とも結婚は望まず〉、〈こんな女の子が奥さんならば、何でも、学校でさえも、おとなになることさえ、そして人生さえ受けとめられる〉(p. 48) と思い、突然、彼女を探ることが生涯の目的だと悟る。(pp. 59-60)

Javitt は、彼女はアジア、アフリカ、南北アメリカ、オーストラリアまで探さねばならないし (p. 59), 〈rogue〉の娘だから、その美しさも〈rogue〉なら、彼女には〈rogue-taste〉(p. 54) があり、そのためには〈学校の先生が教えようとすることは全部忘れなくてはならない、馬商人のように嘘をつかなくちゃいけないし、ここに居る時のように忠誠心に縛られたりしてはだめだ〉(p. 67) と教える。Miss Ramsgate を探す方法、嘘つきで、不誠実で忠誠心など持ってはならぬ、という人間の在り方は、彼が Wilditch 少年に教えた人生の生き方でもあった。

Be disloyal. It's your duty to the human race. . . . If you have to earn a living, boy, and the price they make you pay is loyalty, be a double agent —and never let either of the two sides know your real name.

(pp. 55—56)

〈不忠実であれ〉 〈二重スパイであれ〉ということは、左右どちらの陣地にも所属せずどっちつかずの立場を守って、どのような状況にあっても、自分の利を守り生きのびてゆく、という生き方である。それは、いかなることにも、立場にも固執しないことであるが、またいかなる場合にも、どちらの側にも自分の本名〈your real name〉、素性あるいは本性を教えないで、自分の利益を守る生き方である。それは、狡賢く、時に機知を働か^(注11)せて、詐欺師として生きのびてゆく〈play knavish tricks〉ことである。この生き方は、とりもなおさず、〈放浪者、無宿者、不正直者、ならず者、^(注12)悪党〉という〈rouge〉のもう一つの性格を明らかにしている。古い英国の法律によれば、無宿者〈rogue〉は、笞で打たれ、熱い鉄棒で耳に穴をあけられていたという。^(注13)〈rogue〉とは、世の中の〈劣等種〉として、正符号〈the plus sign〉の世界からの、はみ出し者、はずれ者〈the plants that deviate

from the proper standard), 除け者, 無宿者という負符号を身につけている存在なのである。Wilditch 少年が Javitt によって導かれた生き方は, 地上の正符号の世界で, 地下に属する負符号を身につけて生きる方法であった。

〈父親〉(p. 48) から学ぶように, 〈世界と宇宙について〉(p. 57), Wilditch 少年が学んだもうひとつのことは, 〈名前〉に関することである。

Javitt はひとりの人間に, 〈種族用の名前〉〈他人用の名前〉〈家族で使う名前〉(pp. 50-51) があるが, 〈自分を引っぱり出してくれた人が知っている名前〉(p. 51) が唯一の〈the power of the name〉(p. 51) を持ち, その名前〈the first name〉(p. 51) を知れば, 自分に責任が生ずる〈the responsibility it would bring〉(p. 51) 名前だと云っている。Javitt は〈自分の最初の名前を知っているのは世の中で自分だけであり〉〈財宝やなんかを持っていても, ここで安心していられる〉のは〈自分の最初の名前を知るようになったからだ〉(p. 51) と語っている。これによれば, 〈the first name〉とは, Javitt の役目, この領域の王として財宝を守る者という役割をあらわしているようである。

さらに Javitt は, 庭師の Ernest がモデル〈There was... about him... something of the gardener my mother disliked〉(p. 43) 〈he had used almost the very words of Javitt〉(p. 72) だという設定には, 〈庭の下〉の〈gardener〉としての役割が明らかにされているようである。そうすると, Javitt が明かすことを禁じている本名〈your real name〉とは, その人の素性を明らかにするという意味で, 人間の本当の役割をあらわす〈the first name〉のことではないだろうか。この世に〈自分を引っぱり出した人が知っている名前〉とは, 人間をこの世に存在せしめる権限と力のある存在が与えることのできる名前のこと, その人間が存在せしめられる理由は, 〈引っぱり出した人〉のみ知るところだからである。

Javitt と一緒にいる間に, Wilditch 少年が知ったもうひとつのことは, 人生において重要だと思われる二つの要素, 〈笑いと恐怖〉である。

That was the strange balance—to and fro—of those days; half the time I was frightened as though I were caged in a nightmare and half the time I only wanted to laugh freely and happily at the strangeness of his speech and the novelty of his ideas. It was as if, for those hours or days, the only important things in life were two, laughter and fear. . . . There are people whose laughter has always a sense of superiority, but it was Javitt who taught me that laughter is more often a sign of equality, of pleasure and not of malice. (p. 44)

Javitt の守る領域では、〈笑い〉と〈恐怖〉の間に〈奇妙なバランス〉をとっている。〈悪夢〉を見ているような〈恐怖〉と〈話の奇妙さと斬新さ〉のもたらず〈自由で楽しい〉〈笑い〉とが混り合っている〈生〉である。そしてその笑いが、〈悪意ではなく平等の、愉しみの表われとしての笑い〉^(注15)であると Javitt が教えるとき、それは、おどけた、ひょうきん者〈a wag〉という〈rogue〉のひとつの特色を云い表わしていることにもなるのである。それは世の中の支配者の表わす〈優越感〉の笑いではなく、少数者であり、はずれ者である〈rogue〉の笑いであって、常に〈平等と愉しみ〉を求めて生きねばならないのである。除け者である〈rogue〉にとって、人生はいつも〈悪夢〉のような恐怖であろう。だから、〈笑い〉と〈恐怖〉の間のバランスをとって生きのびるのが、〈rogue〉の知恵であるかもしれない。その生きざまは決して、すっきりと心地良いものではなく、グロテスクでさえあるかもしれない。そのような意味で、この〈笑い〉と〈恐怖〉という〈rogue〉の生の特色は、〈laughter to point up the horrors〉^(注16)〈disturbing combination of innocence and depravity, of farce and horror, of passionate fervour issuing in ludicrous incident that turns deadly〉^(注17)という〈tragi-comedy〉の様相を帯びてくるのである。

Wilditch 少年の冒険物語が伝えているのは、このようにして、人生への参入の儀式、人生の秘訣の伝授であるとも解釈できるのである。

ところで、この第二部の物語は Wilditch 少年が夏の休暇のたびに訪れていた〈Winton Hall の庭の下で、彼がみつけたこと、あるいは、みつけたと夢みたこと〉(p. 28) を、初老の Wilditch が記憶を辿って書き付けたものである。彼にとっての唯一の夢 (p.17) が現実のことではないと理性的には判断しつつも、終始、事実関係を確かめようとする誘惑にかられている。それは、彼の心の奥底にある、彼の生涯を決定した、この夢の〈リアリティ〉の強さ、真実さを表わしていると考えられるが、彼の最後の依りどころは、〈夢を見たという事実〉(p. 29)、夢という、理性では解せない〈mystery〉の状況を、そっくりそのまま〈integrity〉をもつものとして、受け入れる姿勢である。〈それは夢の他の何ものでもあり得なかった。だが、夢もまたひとつの体験であり、夢のイメージはそれなりに完全なものである〉(p. 27) ならば、夢の中の事実は、まぎれもないひとつの事実として受けとめることができる。実際の人生では、ひとつの事実には、ごまかしや偽物が入りこむ可能性があるが、夢の中では見た通りなのだ。偽物は偽物、本物は見かけどりの本物なのだ。だから〈絶体的なリアリティは夢にあり、人生にはない〉(p. 64) のである。夢の中ではくもっとも王者らしい人物が王者なのだ〉(p. 64)。これが夢の〈リアリティ〉の根拠である。Wilditch 少年が夢の中で見つけたことは、すべて、夢という体験に支えられた事実であり、完全なひとつの世界としての〈integrity〉をもっている。

だがここで、その〈リアリティ〉を Wilditch の生涯にわたる実際の生き方を方向づけるだけの、積極的な機動力とならせる、ひとつの梃子が必要であり、そのバネとなる力が何であったか、という問題が残っている。

I stared at her as though I wanted to memorise her for ever. And that is exactly what I did. (p. 48)

初めて Miss Ramsgate の写真を見た少年 Wilditch が、生涯ずっと彼女を想い、胸に抱いて来た、という設定は、単に彼女に憧れ続けてきた、というだけでなく、彼女が実は、彼の行動を世界のあちこちに押し進めて

いく原動力になってきた、ということを云っている。つまり、Miss Ramsgate の美しさが、〈rogue〉のものでありながら、彼の現実の人生の場である正符号の世界で、美人コンテストに出場できるという評価を与えられているという点に、彼の夢の〈リアリティ〉が、積極的な現実の彼の内的〈リアリティ〉に転換する可能性がある。Miss Ramsgate が、〈rogue〉の土壌に根を持ちながら、地上の正符号の世界でもその存在権を獲得するということは、彼女が Javitt の負符号の世界と正符号の世界とをつなぐ存在であるばかりでなく、正符号の世界で認められるというその価値によって、正と負が逆転するというパラドックスが成立しているということでもある。この一点が、Wilditch の夢の〈リアリティ〉が、正符号の世界での〈リアリティ〉に変質する力点となっていると考えられるのである。

だが、このパラドックスを、Wilditch の生と交わらせたのは、財宝はくそれによって何を買えるかということではなく、それが財宝であるということによって価値があり、〈きらめいたり光ったりするので関心を持つコクマルガラス〉(p. 64)の無知とも云える彼の無心〈innocence〉である。^(注18)それは〈even the graffiti on walls were innocent〉(p. 49)という、先入観や経験によらない無心の価値判断であり、美しいものを、ただその美しさのゆえに追い求めるという無心の憧れである。

Javitt の教えに従って、〈rogue〉としての生き方をして来たことを誇りに思う〈at least he had never taken his various professions seriously: he had been loyal to no one—not even to the girl in Africa〉(p. 73) Wilditch は、人生へと、〈innocence〉の憧れに押し出されてきたのである。その行手に目差している Miss Ramsgate は、彼の夢の〈リアリティ〉が、現実の内的〈リアリティ〉へと転換することの象徴として読みとることができよう。^(注19)このような Miss Ramsgate の存在がなければ、第二部は単なる少年の夢物語、空想のお話で終わったはずである。

*

さて、このような Wilditch の内的〈リアリティ〉をあらためて確認す

る場として、第三部の池の島の場面が設定されているようである。

翌朝、島に渡った彼は、心のなかの島と現実の島の違いの大きさに驚いて、〈全生涯が無駄に費やされ〉、〈女に裏切られた男が、幸福な彼女との年月さえ心から拭い去ってしまう〉(p. 73) ときのようにだと思ったりする。だが、黄色のペンキの数片が付着した古い室内便器 (p. 74) を見つけることによって、彼は自分の〈リアリティ〉の確かさを再確認している。それは、第一部と第三部に描出されている、彼の未来に対する姿勢の違いによって明らかである。

第一部で、手術を必要とする状態であると医師に告げられた彼は、自分の生命の延長に対して消極的〈I do have to decide, ... whether I want my particular kind of life prolonged〉(p. 14) であり、自分の未来に好奇心や関心〈no curiosity at all about the future〉(p. 14) を抱いていない。だが室内便器を見つけたあとでは、彼の次のような描写によって作品が終了している。

He had a sense that there was a decision he had to make all over again. Curiosity was growing inside him like the cancer. . . . and he thought, 'Poor mother—she had reason to fear,' turning the tin chamber-pot on his lap.

(p. 75)

彼は、再び、あらためて心を決めてゆかねばならないことを、これからの未来へ新しい好奇心が生じていることを自覚している。そしてさらに、その新しい決心が、実は〈母親の恐れる〉ようなこと、彼女の恐れる生き方であることも覚えているのである。母親の〈clear〉に対して、いつもトラブルのあった Ernest、及び Javitt の共通点である〈ambiguity〉(p. 70) が対立するように、この〈庭〉を支配する二つの勢力の一方に Wilditch が属していることを、母親から離れて、独立して生きてゆくことを明らかにしているのである。

いわば相反する力に支配されている〈Winton Hall の庭〉は、Wilditch

の内的〈リアリティ〉を確認するための、あるいは、裏づけるための枠組みの場、カイロスの時を形象する場としての役割があると云えよう。

〈Curiosity was growing inside him like the cancer〉は、新しい未来への好奇心、関心と、それを内部から喰いつくして抹殺する死（癌）のイメージによって、死に向って生き続けるというパラドックスを表わしている。それは Wilditch という登場人物によって表象されている人間存在の現象である。

Ⅲ

Javitt を通じて Wilditch に生き方として受けつがれている〈rogue〉の人物像は、この作品において初めて描かれているわけではない。すでに *England Made Me* (1935) の Anthony, 世間から見れば、ろくでなしのやっかいな男、世間からはみ出していく劣等種としての Anthony に、〈rogue〉として描かれている *Comedians* の Jones と共通する性格づけがなされている。^(注20) 〈rogue〉ということ、〈A plant that falls short of a standard required by nurserymen, gardeners, etc.〉、^(注21) 〈the plant that deviate from the proper standard〉と理解するならば、〈rogue〉という負符号をもつ人物像の系譜は、その、世間から望まれない、やっかいな規格はずれの性格を表わすひとつの特徴を、〈innocence〉ということばで表象される人物像にたどることができよう。〈innocence〉によって表現される人物は、*England Made Me* の Anthony 以後は、女性像として描出され、*The End of the Affair* (1951) の Sarah が中心的人物である以外は、すべて脇役の人物である。*The Quiet American* の Pyle 像には、主人公ではないが、かなりの比重がおかれている。*A Burnt-Out Case* においては、〈innocence〉は Marie について Query が云い表わすことばとして用いられていて、彼女の性格設定は *The Heart of the Matter* の Helen に類似している。^(注22)

ところで、世間的な地位と名声と富を捨てて、アフリカの奥地へと向った Query の行動とその自己追求の過程は、Javitt のことばを用いるなら

ば、〈正符号〉の領域から、ひたすらゼロへ、原点へと志向する過程であると云えないだろうか。Querry 像は、人間の原点へと回帰し続け、ついに人間の〈不条理〉という〈zero〉^(注23)に到ったのだとも解釈されるのである。

Wilditch 少年の島の底へ、庭の底へと進む道程は、そのゼロから負符号の領域への進入をあらわしている。そして、その負符号の領域で生れた Miss Ramsgate の、〈正符号〉の領域における美の評価という存在権獲得のパラドックスによって、〈rogue〉の復権が象徴されていると読むこともできるのである。Wilditch 少年が、〈正符号〉の方法では探し出せない〈rogue〉に根を持つ Miss Ramsgate の美しさを、無垢〈innocence〉の心で認めたことが、彼の生への出発であり、基盤であり、目的であるという、生の〈リアリティ〉となったという意味で、彼は〈rogue〉でありながら、〈innocent〉である *Comedians* の Jones と同じ祖型から生れているといえることができるのである。

このような点で、*Under the Garden* は、*A Burnt-Out Case* から *Comedians* へ到る橋の役割を果たしていると考えられる。また、この作品は、Greene の世界における〈rogue〉の人物像の復権を物語り、作者自ら語る〈tragi-comic region〉^(注24)への道案内ともなっているように思われるのである。

* * * * *

(注)

1. *A Burnt-Out Case*, William Heinemann & The Bodley Head, 1974, p.xvi.
2. *Collected Stories*, The Bodley Head & William Heinemann, 1972, p.viii.
3. 青木雄造編『グレアム・グリーン』研究社, 1975, pp. 197-198.
4. *The Sense of an Ending*, F. Kermode, Oxford University Press, 1975, pp. 46-47.
5. *A Sort of Life*, The Bodley Head, 1971, p. 21.
6. *ibid.* p. 22.
7. フェビアン主義とは、英国の社会主義研究と啓蒙の団体、フェビアン協会の主張する社会主義のことで、「社会の経済的諸資源の集团的所有と民主的管

- 理を通じて、個人および支配階級の経済的権力と特権が廃棄される社会を、民主主義の方法によって建設する」ことをめざす。『万有大百科事典』12、小学館、1975。
8. 若桑みどり『薔薇のイコノロジー』青土社、1984。
海津忠雄『愛の庭』日本基督教団出版局、1981、参照。
 9. 川崎寿彦『庭のイングランド』名古屋大学出版会、1983、p. 208.
 10. *The Origin of Species*, Charles Darwin, Collier Macmillan Publishers, 1974, p. 49.
 11. *The Century Dictionary*, An Encyclopedic Lexicon of the English Language, Meicho-Fukyukai, 1980.
 12. *ibid.*
 13. *ibid.*
 14. *The Origin of Species*, p. 49.
 15. *The Century Dictionary*
 16. *McGraw-Hill Encyclopedia of World Drama*, McGraw-Hill Inc. Second Edition, 1984.
 17. *Encyclopaedia Britannica* 4, Encyclopaedia Britannica Inc. 1977.
 18. *Dictionary of Symbols and Imagery*, Ad de Vries, North-Holland Publishing Company, 1976.
 19. Peter Wolfe は <A figure of fancy in a fantastic tale, the Ramsgate Beauty Queen nonetheless shows corruption working for renewal and vitality.> と解釈している。Graham Greene, the Entertainer, Southern Illinois University Press, 1973, p. 85.
 20. Innocence of Anthony—その2—「英米文学研究」14号、梅光女学院大学英米文学会、1978、参照。
 21. *The Century Dictionary*
 22. ふたりの Rose—その1、その2、その3—「英米文学研究」15、16、17号、梅光女学院大学英米文学会、1979—1981。
The Quiet American II—The Innocent—「英米文学研究」11号、梅光女学院大学英米文学会、1975、参照。
 23. 「燃えつきた人間」の場合、佐藤泰正編『文学における身体』笠間書院、1984、参照。
 24. *A Burnt-Out Case*, William Heinemann & The Bodley Head, 1974, p. xvi.

なお、文中の訳文については、高見幸郎訳『現実的感覚』早川書房、昭和44年版を参照いたしました。